

# 男女共同参画センターにおける 女性の就労支援 ～横浜市の事例から



2020年2月

男女共同参画センター横浜南  
指定管理者：横浜市男女共同参画推進協会

小園(こその) 弥生

# 男女共同参画センターでは

## ① 名前のない課題、ニーズを調査・発信

### 当事者の声を聞き、支援事業を組み立てる

1984 「横浜市女性の再就職調査」

1993 『民間女性シェルター調査報告書』日本/米国

2009「若年女性無業者の自立支援に向けた生活状況調査」★

※ 2015 『下層化する女性たち』(勁草書房) 第8章 ガールズ支援の現場から

2015 「非正規職シングル女性の社会的支援に向けた  
ニーズ調査報告書」★ → 横浜市男女共同参画推進協会サイトで読めます。

2017 『シングル女性の貧困』(明石書店)

# 男女共同参画センターでは

## ② 女性特有の社会課題解決に取り組む

たとえば若年女性では ●母娘問題 ●結婚・出産圧力  
●婦人科系の病気や月経周期にかかわる不調  
●家庭内で介護や家事は娘に ●非正規雇用しかない等  
「社会や家族の中で期待される、あるいは期待されない  
役割が、女性の働きづらさを複雑化している」(よこはまサポステ)

### 【センターの役割】

- ・心身と性に対する自己尊重感をもち、若い女性が働くイメージをもてるようにしていくこと
- ・個人の問題ではなく社会の問題として発信していくこと

# 男女共同参画センターでは

## ③ グループ型支援を得意としてきた

1980年代末から個別相談のみならず、女性の就労や健康支援、相談支援に**グループ・ダイナミクス**を活用し**自助グループ支援**にも取り組んできた。その効用は、



- ・ありのままの自分である、安心感を体験する。
- ・他のメンバーの体験を聴く(自分も語る)。
- ・仲間の中で、自分の状況をみる。

# 若年女性(ガールズ)支援の事例では

「若年女性無業者の自立支援に向けた生活状況調査」 2009

15歳から35歳の未婚女性にアンケート、郵送で回答

- 女性たちは生活上の困難な経験を重層的に経験していた  
例:いじめ・うつで通院・親の支配・食べ吐き・暴力など
- 非正規雇用で、短期間働いたりやめたりをくり返していた  
⇒育成され、スキルを積み上げ、働き続けられる職場がない
- 結婚や将来の暮らし方が見えない、わからない
- そんななかで、「対人関係が苦手、こわい」ながらも  
「なんとかして働きたい」と望んでいた

# 若年女性支援事業の流れ



**ガールズ講座**  
11日間  
年間2コース

**社会参加  
(ボランティア)体験**

**就労体験**  
・めぐカフェ  
・ライブラリ

**【就労・参画】**

- ・一般就労
- ・他の就労
- ・福祉等制度利用
- ・その組合せ

**若者サポートステーション等での個別サポート**

- 2009年春～ガールズ編しごと準備講座 22期、440人修了
- 2010年末～就労体験「めぐカフェ」 約120人修了 (2020年2月現在)
- 2015年～ 社会参加体験 地域の9団体による受入れ、年間のべ100人参加
- 2019年 「ガールズ講座」と「就労体験」修了者調査 (2種) 神奈川新聞で連載される

# 「ガールズ編 しごとと準備講座

～働きづらさに悩むあなたに～

全11日間 定員20人、15～39歳単身女性

## ◎特徴

1 「相談」ではなく、

「グループ(講座)」が入口

- ・同じような悩みをかかえた仲間に出会う
- ・自己開示を強要せず、安全な場を共に作る

2 呼吸・声・からだほぐし等

身体面からのアプローチ

- ・「自分を大切にすること」を知る  
(心身のケア、食事、アサーティブネス)

3 社会とつながる

- ・さまざまなサポートや社会資源を知り、助けを求められるように



# 講座参加者の声

- ✓外に出ることができた。朝起きて夜寝る生活に。
- ✓同じ立場の人と出会えた。あきらめないでいくよ!
- ✓相談できる場所がいろいろあるとわかって安心
- ✓絵を描いたりものを作る人になりたいと自分発見
- ✓ここでは・・・追い詰められなくてよかった
- ✓通院歴10年。「世の中に期待しすぎず、活用できるものを見つけていきます」

こんな声も・・・「30歳崖っぷち。婚活と就活どっちが先？」

講座後、すぐに一般就労とはいかない現実から・・・  
就労体験や社会参加体験の場をつくることにした。



# 就労体験「めぐカフェ」

男女共同参画センター横浜南 1階



めぐカフェサイト +  
めぐちゃんツイッター

2010年盛夏より、ガールズ講座修了生  
約20人のチームで開設準備。命名も。

開店 火・水・木・金 11:30-16:00

## 対象:

ガールズ講座修了あるいは  
サポステからの紹介者。  
主治医が賛成していて、  
遅刻欠席なく通える人。

## 特長:

- ・一般客が来る、下町の公共施設の中のカフェ
- ・雇用でなく、見守りのある中間的就労の位置づけ
- ・目標を本人が設定。体験の場はグループ型支援、個別支援はサポステ等を併用。機関連携で支援

# 就労体験の内容

**【ステップ1】** 受入れ：8名程度

3時間×10回(週2回、期間は1ヵ月半) 手当なし

内容：講習、野菜販売体験、カフェ実習、レポート発表

**【ステップ2】** 受入れ：4名まで

3時間×20回(週2回、期間は約3ヵ月) 手当付き

内容：開店・閉店準備、調理補助、配膳、接客補助

・ステップごとにレポート提出、面談をへて 受入れ決定。

「時間を守る・声を出す」→「チームで動く」→「サービス提供」

# 利用者の背景

※実際の困難な要因・組合せは1人ひとりちがいます。

- 学校でいじめや不登校を経験した人が増加
- 周囲のペースと合わない、浮いてしまう
- 働いたことがない or 短期間しかない
- 働く中で、精神的な傷や二次障害を負う
- メンタル不調、体調管理が課題
- 家族(とくに母)との関係が強い影響を及ぼす  
+ 女性であるがゆえの諸問題

# 修了者のその後

「ガールズ講座修了者調査」によると、

「一度でも収入のある仕事や活動をした」人は

**61.3%** (2013年調査) ➡ **82.4%** (2018年調査)

- ・ 就活スキルではなく体験談を増やすなどわかちあいを充実
- ・ 就労体験や社会参加体験のプログラムが軌道に乗り、奏功

## ■ 回答者の自由記述より

「講座は“働いていない”を“働いている”に変える対症療法的なものというより、じわじわとその後の人生に影響を与え、励ます性質のものだった。

自己肯定感や人権意識を身につけていくきっかけになった」

# センター担当者のスタンス

「私たちはいくつかある“船着場”の一つ。そこは人がふらりと来て休んだり、給水したり、仲間とお茶をしたり、情報を得て針路を探したり、なじみのスタッフとちょっと話したりできる。そんなふうに通じる“船着場”にいつ立ち寄られてもいいように、環境や情報を整えていたい。そこに仲間がいる。  
たやすくはないが、それが望ましい支援ではないか」

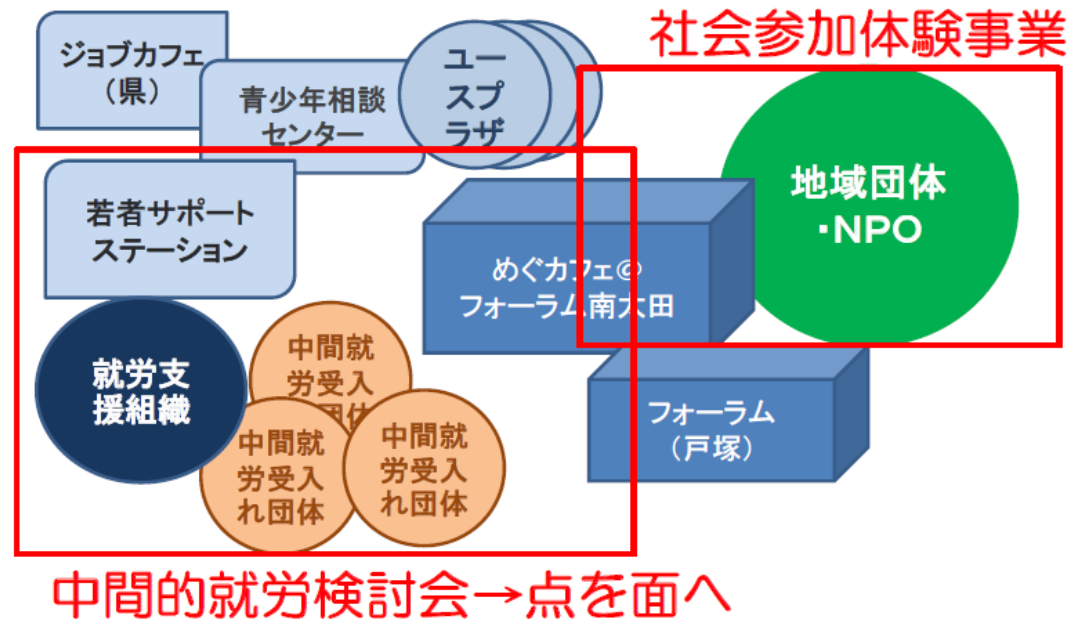
(ガールズ講座第2回修了者調査報告書 より)

「完璧ではない者どうし、フォローし合って、  
しんどい荷物をおろしながらやっていきたい」

# 支援する側の課題～地域と社会へ

- 点在する支援機関・支援者の孤立を脱し、地域の資源というキルトをつなげて

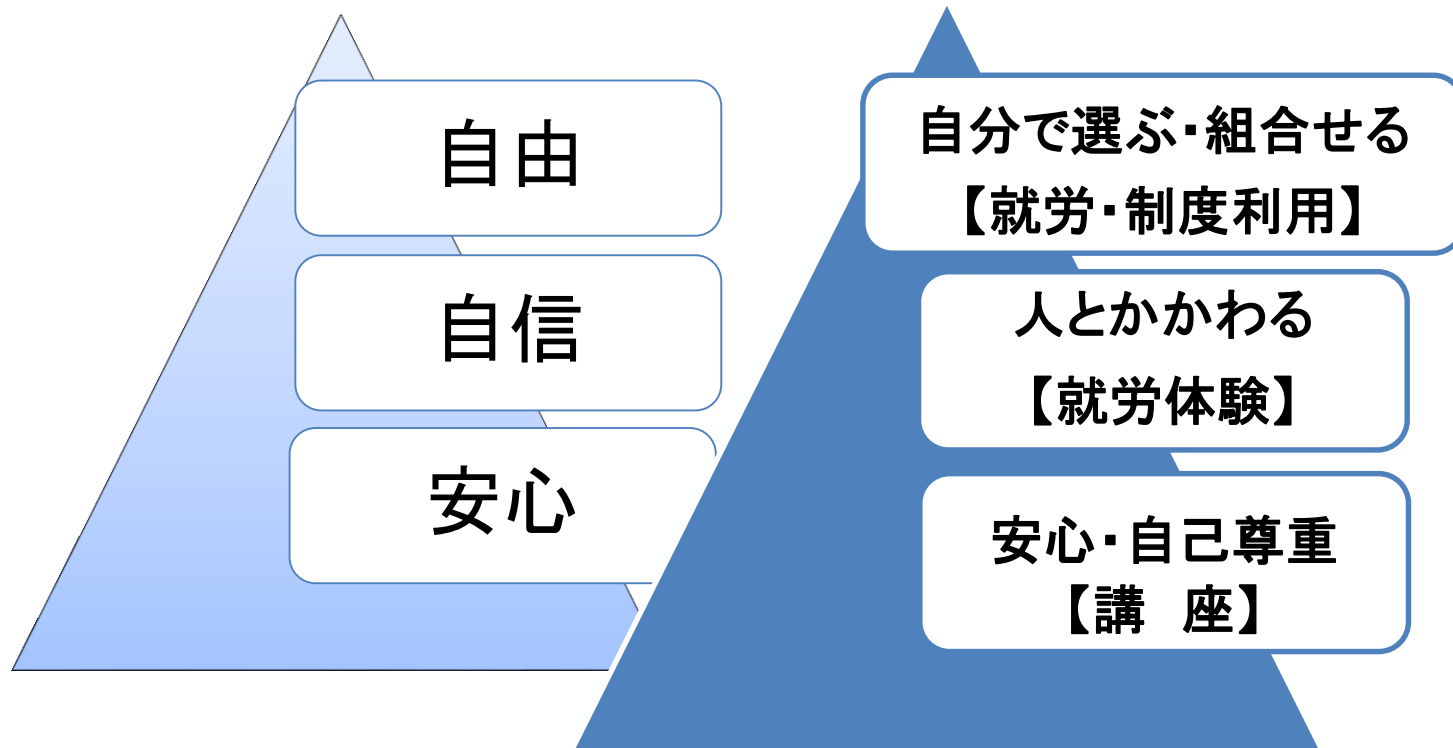
## 就労体験と地域(横浜)



- 社会への働きかけ・・・予算と継続性の担保、人をゆっくりに育てられる職場づくり、女性や若者がまじめに働けば暮らせる最低賃金、交通費、健康診断の確保 等

# 自立のかたちは人それぞれ

自立とは？ 助けを求め、一般就労、障がい者枠での就労、ものづくり、福祉制度の利用、親などの資源から選択し、パッチワークのように組み合わせ、サバイバルしていくことでは？



# パッチワーク・サバイバル

～あなたはどのように考えますか？





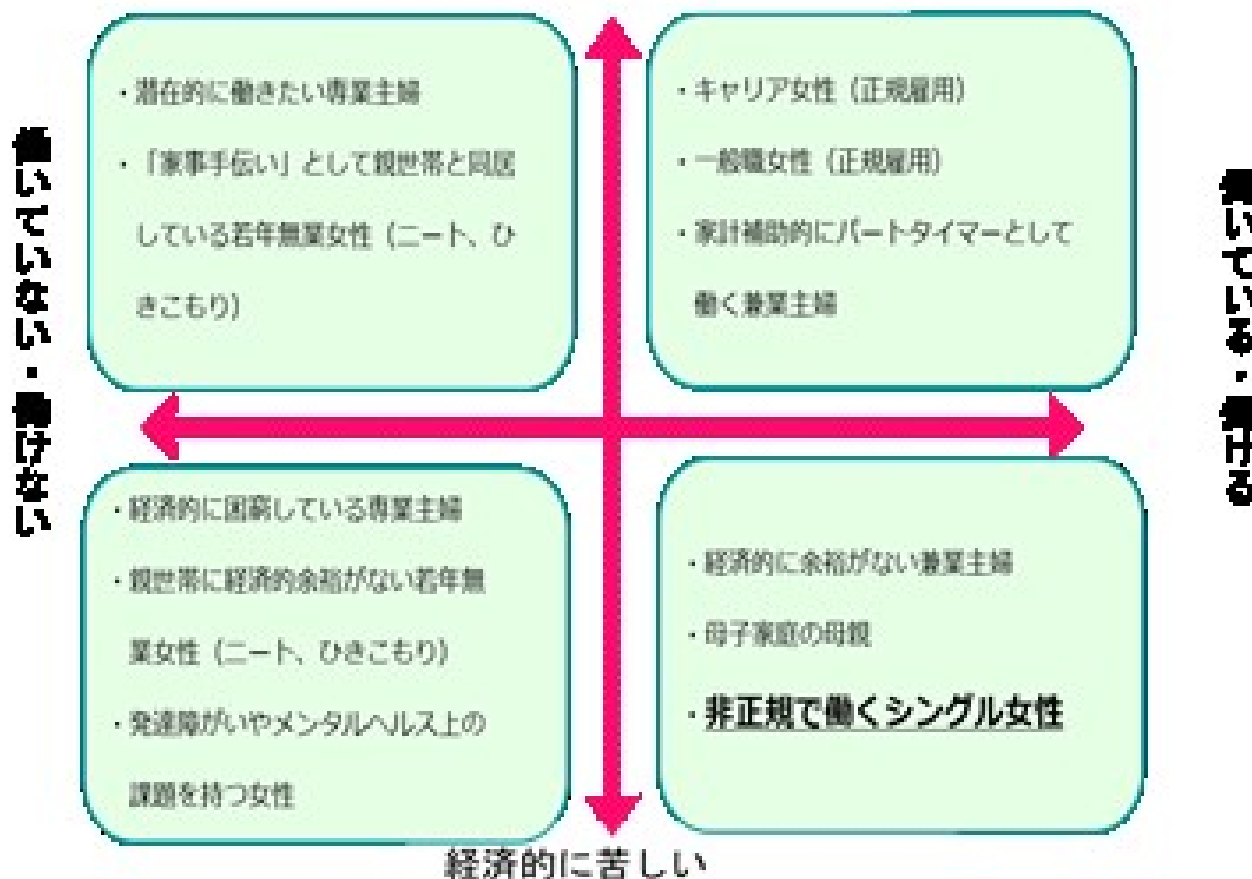
# 男女共同参画センターの強みは

- ・資格・成績等に縁遠く、ジャッジされない場。  
選んで自発的に利用する場であること  
(情報を届ける、来てもらう工夫が必要)
- ・安全な場を作り、先行くなかまに出会えること  
(安全・安心を未体験の人が増えている中・・・)
- ・ジェンダー視点での個別相談や情報提供ができる

# センターの就業支援事業の対象は？

## 横浜における対象層の見直し 2014年

経済的に余裕がある



# どうやって、誰に届けるか

## ■ すべての女性に

横浜では「女性としごとの応援デスク」

- ・無料相談・・・キャリア、社労士、ハラスメント等
- ・ミニセミナー      ・体験談サロン

## ■ 対象・世代ごとに分けて場(コミュニティ)作り

- ・シングルマザー   ・ガールズ
- ・非正規職シングル(氷河期世代)

※留意点は、経済的に困難な層に活用してもらえるよう、様々な拠点に足を運び情報を届けてもらうこと。場の力、当事者の力を信頼すること。職員のチームを作り、外部と連携し地域人材や団体の力を借りること。

# 男女共同参画センターが いまでできること

- この業界が始まった30年前とは異なり、労働にも家族にも包摂されない女性が増加。「女性の貧困」が現実となった今、氷河期以降の世代の声をきちんと聴く
- 「働く」は賃労働だけではなく、自分のケアや制度活用を含むという認識に立ち、制度や知恵を知り、分かち合う場をつくる
- 「自助グループ」や当事者活動を支えるしくみをつくり、環境を整える、見守る
- 支援者然としない、対等性をめざしつつ場を支える人材を養成する